

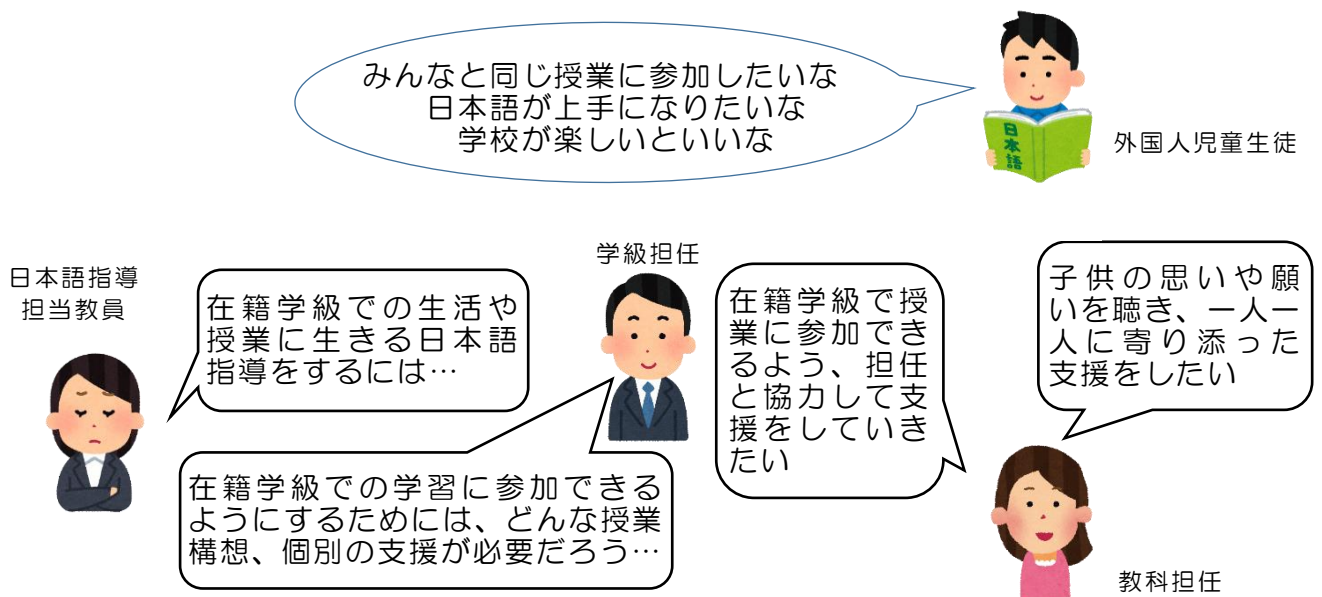
I 日本語を母語としない児童生徒のための学習支援について

1 日本語で学習に参加する力の育成

日本語で行われる在籍学級での授業に参加し、周囲の支援や様々な関わりを通して支障なく学習に取り組めるようにすることが、支援の主な目標となります。

児童生徒は、ほとんどの時間を在籍学級で過ごしている

→ 在籍学級の授業を大切な学びの場にしていく支援が必要



(1) 日本語支援の基本的な考え方

① 日本語の力や学力の個人差に対応した支援

対象となる児童生徒の日本語の力や学習経験、既有知識、学力等は多様です。実態を把握した上で、一人一人に対応した日本語支援を行います。

② 日本語の力の発達に合わせた支援

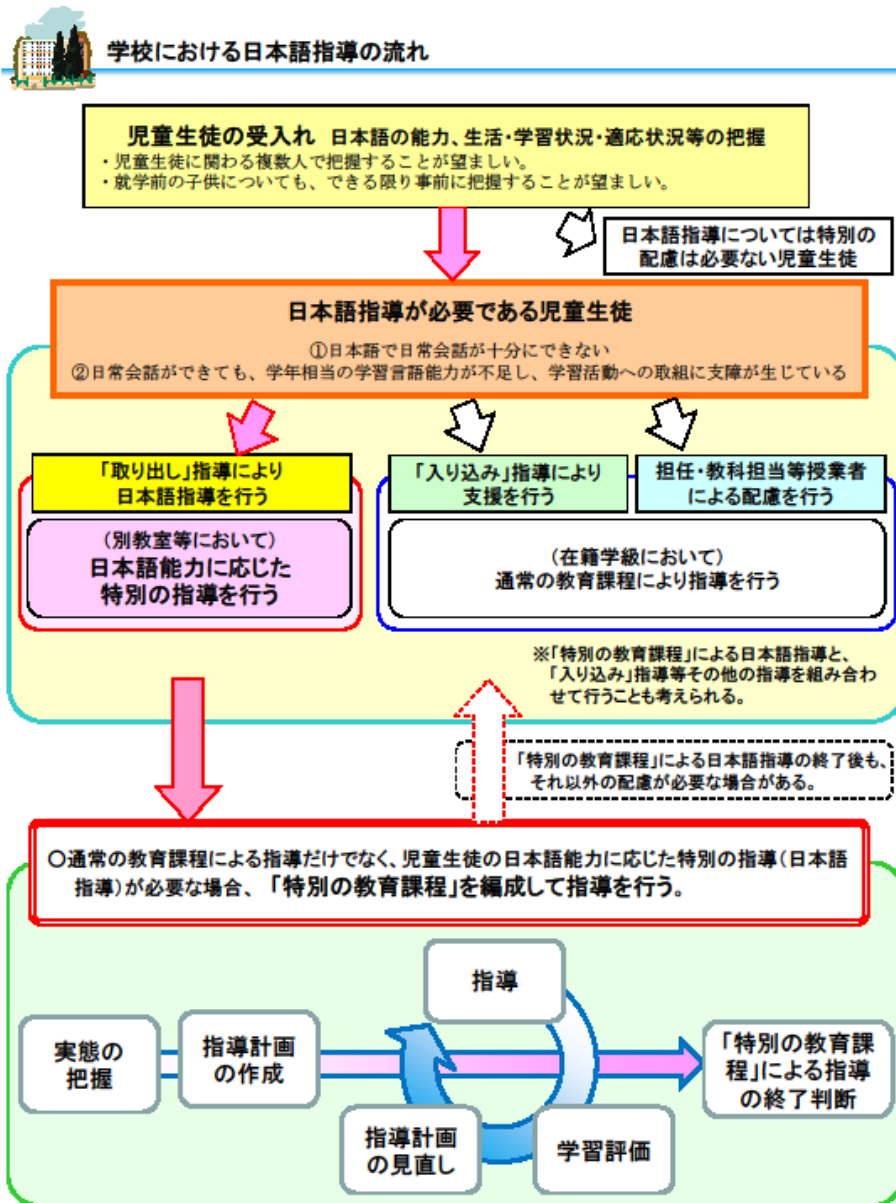
児童生徒の日本語の力の発達の状況は、一人一人が異なるとともに、その発達の道筋も多様です。児童生徒の日本語の力の発達の段階に合った支援を行います。

③ 考える力を育成する支援

日本語を学習への参加のための道具として捉え、日本語の力を高めると同時に、教科学習への参加のために必要な「考える力」を育成することを目指します。

(2) 日本語指導の流れ

【手引の関連項目】



DLA の活用
手引 No.26

「特別の教育課程」
手引 No.27

「内容と日本語の統合学習」
(JSL カリキュラム)
手引 No.27、28

「個別の指導計画」
手引 No.27

「学校における日本語指導の流れ」文部科学省

「特別の教育課程」
 在籍学級の教育課程の一部に替えて、別の教室で日本語指導を行う場合について、一定の要件のもと編成・実施するもの

「内容と日本語の統合学習」
 教科等内容を学ぶことと日本語を学ぶことを、一つのカリキュラムとして構成して、児童生徒にとって必要な教科等の内容と日本語の表現とを組み合わせるようにした授業

(3) 日本語支援の五つの視点

日本語支援の視点として、「言語操作に直接関わる支援（直接支援）」と「学び方や環境整備に間接的に関わる支援（間接支援）」が考えられます。

「言語操作に直接関わる支援（直接支援）」

㉗ 理解支援

児童生徒が新しい語彙の意味が分からずにいるときに、易しい言葉に言い換えて説明するなど、理解を促す支援

㉘ 表現支援

児童生徒が適当な表現を見付けられないときに、表現をいくつか示して選択させるなど、表現を促す支援

㉙ 記憶支援

繰り返し聞かせて定着を促進するなど、記憶を促す支援

「学び方や環境整備に間接的に関わる支援（間接支援）」

㉚ 自律支援

自分の学習を管理して学習を進める力を育む支援

㉛ 情意支援

情意的側面に留意し、児童生徒が自信や意欲をもって学習を進められる環境をつくったり、自分の感情をコントロールしたりできるようにする支援

間接支援とは、目標設定、活動構成、利用する資料、作業のさせ方、自己評価等によって自律的な学び方を身に付ける学習の場を設計すること、学習活動への参加を通して学ぶことの面白さや楽しさを仲間と共有できるように働きかけること、児童生徒の学習参加を励まし評価すること、学習のための人的・物的・社会的リソースを豊かに配置して学習環境を整備すること等をいいます。

(4) 日本語支援の具体例

以下を参考に、個別の授業、児童生徒一人一人の状況に応じた具体的な支援方法を考えることが大切です。

学習場面を想定した直接支援・間接支援の例

	支 援	支援の具体例	
直 接 支 援	㉗ 理解支援	言い換える	児童生徒が知っている言葉や母語等で言い換える
		視覚化する	実物、模型、絵、写真、図等を利用する 色分けして示す
		例示する	具体的な例を示す
		比喩を利用する	児童生徒が知っているものに例える
		対比する	対になる言葉や事柄を示す
		明示する	課題、手順、見通し、流れ等を明確に示す
		簡略化する	幾つかに分割したり、重要な点だけに絞ったりして簡略化して示す
		整理する	分かりやすく整理して示す
		補足する	背景知識や言葉、情報等を補う
		関連付け	事柄の関係性（因果関係、順次性、上位・下位等）を示して理解を促す
		既有知識の活性化をする	先行経験、既習知識に関連付けて説明する
	㉘ 表現支援	選択肢を示す	語彙や表現の例を示し、選べるようにする
		表現方法を示す	言葉以外の表現方法（絵、写真、図等）を示し、多様な方法での表現を促す
		モデルを示す	文や文章レベルで、発表や作文のモデルを示す
		キーワードを示す	内容に関するキーワードを示し、表現内容を構成できるようにする
		対話で引き出す	やり取りで表現したい内容を引き出し、文章化する
		母語で表すようにする	母語で表現し、それを日本語で表せるようにする
		学習した内容を分割して示す	学習した内容を分割して示し、並べ替えや選択できるようにして、発表内容を構成できるようにする
		内容構成のためのシートを準備する	発表／作文の構成をシートで示し、それに基づいて内容を構成させる

直接支援	㊦ 記憶支援	内容の構成例を示す	発表／作文の内容構成の例を示し、参考にできるようにする
		視覚化する	絵を描くなど視覚イメージに結び付けて示す
		身体化する	意味を身体で表したり、機械的に手や体を動かす動作と結び付けたりする
		音声化する	語彙や表現を声に出して、リズムカルに言えるようにする
		物語化する	意味のある文や会話、物語の中に入れて込んで示す
		連想できるようにする	関連のある言葉や事柄を結び付けて示す
		グループ化する	トピックや使い方、類似の意味等で言葉をグループ分けする
		反復する	上記の工夫をして、繰り返し聞いたり、言ったり、書いたり、読んだりできるようにする
		接触機会を増やす	上記の工夫をして、多様な活動を通して新しい語彙・表現に触れる機会を確保する
間接支援	㊧ 自律支援	<p>指導者は、「児童生徒が自分自身で学習を進められるようになるにはどうすればよいか」を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味の分からない語を、端末を使って調べさせる ・周囲の人に尋ねる練習をさせる ・インターネット、各種メディアから情報を得る方法を知らせる ・指導者以外の人やボランティア、友人、コミュニティ等から、知識や情報を得るように示唆を与えたり、課題を設定したりする <p>上記の依頼の仕方や、得た情報を整理する方法を共に考えることが自律的に学ぶ力を高める一助となる。</p>	
	㊨ 情意支援	<p>指導者は、「児童生徒の心理的側面」に注意を払う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援者の賞賛が、学習意欲を保つ支えとなり、ほめることで次への意欲につなげる ・理解や表現に時間がかかるときは、指導者は余裕をもって待つ ・ステップを踏んで学習を続けていけば「これができるようになる」という学習の見通しを児童生徒に示す <p>「できる」という自信は安心感につながり、安心感の下では記憶も促進される。</p>	

2 J S Lカリキュラムの基本的な考え方

J S Lとは、文部科学省において日本語指導と教科指導を統合し、学習活動に参加するための力の育成を目指して開発されたものであり、Japanese as a Second Language「第二言語としての日本語」カリキュラム（以下、J S Lカリキュラム）のことをいいます。

J S Lは、文型や語彙などを中心にした日本語指導と組み合わせることにより、児童生徒を教室での学習活動に参加させていくことをねらいとしています。

日本語指導が必要な児童生徒の教育における課題は、学習に参加するための「学ぶ力」の育成であり、「学ぶ力」を基礎にして各教科の授業に日本語で参加できる力を育成することが重要です。

学習活動に参加するには日本語は不可欠ですが、日本語を習得すれば自ずと学習に参加するための力が身に付くとはいえません。児童生徒は教材、教師・指導者、友達を通して多くのことを学習しており、日本語を母語にする児童生徒と一緒に学習していくことが重要です。そのためには、適切な教材や教師・指導者の支え等が不可欠になります。教科特有の語彙の習得を、文脈から切り離した単なる辞書的理解としていては、学習活動に参加するための力は育っていかないため、各教科特有の文脈に即した理解を促す必要があり、J S Lはその手立てとして、有効です。

J S Lカリキュラムの対象となる児童生徒の背景は多様であり、同じ年齢でも母語、文化的背景、生育歴、学習歴、来日時期、学力、日本語力、希望進路等によって、必要な支援も児童生徒ごとに違ってきます。例えば、中学校で第1学年に編入する場合、その生徒の日本語力、母国での学習の違い、将来どの程度日本に居住するのかなどにより日本語指導も異なり、その生徒にどのような学力を付けるのかも異なります。つまり、画一的に設定されたカリキュラムでは、多様な背景をもつ児童生徒には対応できません。また、児童生徒を受け入れる学校の現状も多様であり、一人一人の児童生徒に合った支援を考えていく必要があるといえます。

J S Lカリキュラムは、目の前にいる多様な児童生徒の必要に応じて、また個々の学校の状況に応じて指導者が学習を組み立て、児童生徒が教室での学習活動に参加できることを目指しています。

3 日本語支援の方法を考えるヒント

日本語を母語としない児童生徒にとって必要なのは、日本語によって教科の学習に実際に参加できるようになることです。授業で教師の説明を理解し、それを自分の頭のなかで整理し、仲間と議論し、学んだことを周囲に発信するといった一連の流れを日本語で組み立てていく経験が重要になります。

(1) 話し言葉と書き言葉

4技能「聞く、話す、読む、書く」は、「聞く・話す」は「話し言葉」で、「読む・書く」が「書き言葉」という捉え方ができます。日常の生活場面でのおしゃべりはできても、教科書での学習は難しいという児童生徒の場合、話し言葉の力は相当高いが、書き言葉の力は十分ではないということになります。日本語の環境に浸っていれば、話し言葉はある程度自然に身に付きますが、書き言葉に関しては、単に話し言葉を文字で置き換えるだけではなく、より意図的、計画的な学習が必要になります。書き言葉では、一般的な内容を抽象的な言葉で伝えることが多くなり、一定量の情報を一方向で伝えることや、伝える内容を構成し計画的に表現すること等が求められます。

(2) 教科学習に特有の言葉の使い方や教科用語

例えば、「とる」という言葉について、日常的な生活では「それ、とって」と、友達に目の前にある本を手渡してくれということや、フックに引っかかっていた紐を外して、「とれた」と給食着の袋を手にすることもあります。しかし、数学で「点をとる」といえば、任意の位置に点を定めることを指し、社会科で「天下をとる」といえば、一国を支配する権力をもつことを表します。教科の学習では、日常の生活で使わない意味で言葉を使うことがあり、教科の知識や概念を表す言葉にも、日常生活ではほとんど使うことのない教科用語と呼ばれているものがあります。こうした言葉の意味や使い方は、教科の学習活動

の中で内容の理解を伴ってこそ、身に付けられると考えられます。言葉だけを切り出して辞書的な意味を伝えても、教科におけるその言葉の意味や使い方を理解したり、運用したりすることにはつながりません。

(3) 分野やジャンルなどによる言葉の使い分け

分野やジャンルによっても日本語の使い方は大きな違いがあります。例えば、「雪が積もっている」ことを表すとしても、物語文の「村はすっぽりと雪に覆われ…」と、説明文の「積雪は3メートルに達した」とでは表現が違います。歴史の教科書ではよく「～が発明されました」のように、歴史上の出来事を受動の表現を使って表しますが、発明家の伝記であれば「～を発明しました」と能動の表現になります。言葉や表現の選び方や文体、調子は、文章だけではなく、その場や相手、内容や目的によってどの言葉や表現を選ぶか、どのような口調で話すか、どのような態度で話すかによって異なります。分野やジャンル、場や相手、内容や目的等の違いによる言葉や表現、文体の使い分け方は、教え込むのではなく、そうした場面を設定して、経験的に学ばせていくような学習の支援が求められます。

次の章では、小学校国語科・社会科・算数科・理科について、日本語を母語としない児童にとっての指導のねらいや授業構造を例示しました。また、中学校国語科・社会科・算数科・理科・英語科については、指導のねらいや各教科の特性を基に、学習活動の例と合わせて、J S Lカリキュラムの考え方を生かした【支援のポイント】を掲載しています。また、J S Lカリキュラムの考え方をういた国語科を「J S L国語科」と表記してあります。